

園のくらしを育む10

日本の保育文化(4) — 行事と製作 —

秋田喜代美

1 行事と製作


五月にはこいのぼり、七月には七夕飾り、十二月にはクリスマスツリーや靴下、二月には節分の豆まきの入れ物、三月にはおひな様など、多くの園では、行事と合わせて伝統的に製作が行われます。子どもたちはその製作過程を通して、行事へのイメージを膨らませていたり、行事の日へ思いを高めていたりしています。行事の精選が言われますが、おそらく日本の保育のアイデンティティ、そして家庭では行わなくなってきた伝統文化が園だからこそ伝えられるものとして、行事が行われ製作も行われていくだろうと思われます。

三、四、五歳という育ちの中で、同じようなものでもどのような素材や大きさのものを各年齢で作るのかは、園での伝承、子どもの育ちを見取る保育者の実践的な見識によって異なってくるように思います。家庭に持ち帰り、親も見るとのこと、出来

上がりの見栄えがそれなりにそろっていてどの子にも同様のものを持たせたいという、結果のところでの完成度にこだわる園もあれば、それぞれの子どもが自分の思いで作る過程こそが大事なことから、保護者にもその園側の思いを伝え、子どもが創意工夫した作品をとという園もあります。ここに保育観は表れると思うと同時に、園において二年なり三年あるいは六年なり繰り返して経験する行事だからこそ、どのような活動を保障していくことが保育の質としては必要かを考えたいと思います。

2 豆の入れ物作り

二月の豆まきの入れ物や三月のひなあられの容器を、先生方の園ではどのようにして作成するよう指導されているでしょうか。福島めばえ幼稚園で三年ほど前に行われた実践のビデオは私にとってはとても心に残るもので、国内外のいろいろな研修の場でもご紹介させていただいています。保育の質を活動の次元で考える一つの契機にもなりました。皆同じ入れ物を新聞紙や折り紙で折ってみる実践はこれまでよく見てきたので、それとの対比で、子どもが創意工夫する経験のあり方を考えさせられました。「豆まきのお豆（あるいはひなあられ）がちょうどカップ一杯入る入れ物を自分たちでそれぞれ作ってみよう」という課題を園として設定し、三、四、五歳で各クラスの子どもたちができるように製作をしていたかという実践をDVDで記録し行った、園内研修のビデオを見せていただきました。



先生は同じことを伝えても、受け止める子どもたちの年齢や能力により、どのように作り出されるか、そこに現れる姿は実にさまざまです。

三歳の子どもたちは、紙を丸めて鬼の金棒のような筒状立体を作ったり、紙を二つに折ってセロハンテープで留めて封筒状の袋を作ったりしています。先生が入れ物としての機能を果たすようになっていくかを確認するために豆を実際に入れてみることで、セロハンテープが貼られていないすき間等から豆がもれることに気づいて作り直しをしたりしています。先生に認めてもらうのがうれしくて、銘々が作って先生に見せています。子どもたちにはまだ立体の面についての感覚はないことがよくわかります。

しかし四歳になると、立体を作っています。時には底面が足りなかったり、途中で気づいて何とか工夫したりし始めています。作る時にテープやホチキスで留めるのに相互に協力して作ったりして、友達の影響を受け合う姿もあちらこちらで見られます。いろいろな形の入れ物を自分なりに工夫して作ることもできるようになっているのがわかります。

そして五歳になると、量に敏感になり、本当にちょうど一杯分入るかどうかを予想して「多い」「小さい」などと語り合いながら豆を入れてみて、友達のものでもうまく入ると喜び合い、うまくいかないともうちよつと工夫を重ねる姿が見られました。また中には前の袋をかたどって紙を切り抜く子がいたり、数ミリでもぴったりの大きさにこだわりの子が続く子が続きます。「失敗して、失敗して、またやってまたやって、何度

でも失敗して、それが人生」と五歳の一人の子がつぶやきます。そこには自分なりの目当てをもちながら挑戦していく姿、自分を励まし続けながらちよつぱり大人びた言葉を語ってみる姿があつたりします。そしてそれぞれの入れ物にまさにその子の工夫が表れていました。

こうした実践は三、四、五歳と発達すれば見られるというのではなく、園でさまざまな紙で立体的なものを自分で作る経験を積み、それなりの手先の器用さや入れ物の量の感覚などが培われて初めて可能となる姿です。先生の言われたとおりに作る入れ物が悪いというのではありません。それもまた貴重な経験です。しかしその一方で、創意工夫しながら作り出す行事の実践もあると思うのです。そして、そこで初めて行事の活動がそれまでの経験を活かし、さらにそれが行事というだけではなく、また次の子どもなりの遊びや活動につながっていく経験になると思われまふ。そしてこうしたビデオを研修で相互に見ることで、園としてこのように発達していつてほしいという育ちの姿を若い保育者も一緒に見て、見通しをもてる機会になるのではないかと感じました。

園の行事は、文化的に受け継がれてきた心を伝えると同時に、それが明日のくらしへの一つの節目になっていく、日本の子どもたちや保育者にとって大事なものです。行事に追われるのではなく、行事から新たに始まる保育であつてほしい。それが園の力と文化になるのではないでしょうか。

(東京大学大学院教授)